

現代短歌 アンソロジー

〈学校・キャンパス〉 三十首

なんでもない場所が歌枕であると知って変貌するように、学校という場所も優れた歌によって特別な陰翳を帯びて見えてくる。ほんやりと感受していた風景や場面が歌というレンズを通して鮮明に映し出される驚き。

高校三年生の時、寺山修司と佐佐木幸綱の歌を知って、頭があんと殴られたような衝撃を受けた。十七歳の感性にビビッドに響いたのである。「煙草くさき国語教師が言うときに明日という語は最もかなし」という寺山の歌。「煙草くさき」という初句によって、国語教師のイメージが具象性を帯びて立ちあがる。それが立ちあがらなければ、「明日という語」という魅力的なフレーズも「最もかなし」という叙述も台無しになってしまう。「煙草くさき国語教師」、この組み合わせが絶妙。ここは国語教師でなくては駄目だろう。それ以外は似合わないのではないか。

「学校の寒き図書館きびきびと辞書繰りてかなしお前の指は」という佐佐木幸綱の一首もわが青春を励ましてくれた。この歌はたぶん「早稲田短歌」に発表されたものだろう。残念ながら歌集には収録されていない。全集に相当する「佐佐木幸綱の世界」の

三枝浩樹

Hiroki Saegusa

〔沃野〕代表



歌集篇にもなかったので、割愛した。この歌によって図書館が一層好きになった。英語の辞書を引くのも嫌ではなくなった。私には懐かしい歌である。

挙げた三十首の多くは教師の歌である。苦悩する教師、生徒の目線に立つ教師、変貌する学生や生徒に怯まずしなやかに対応する教師、管理の責を負う教師等々それぞれの像が見える。「傷つけてはた傷ついて来しことの形見のごとし草の残り日」、現場の教師は生徒から目を逸らさない限り、佐藤通雅のこの歌のような思いから逃れられない。教育の難しい現場が改めて思われる一首である。学生、生徒の立場から歌われた永田紅や小島なおのような歌の瑞々しさに救われる。「学校 あの不思議な場所／校門をくぐりながら蛇蝎のごとく嫌ったところ／飛びたつと／森のようにつかしいところ」と歌ったのは茨木のり子。懐かしく、かなしい場所なのである、学校は。



煙草くさき国語教師が言うときに明日という日は最もかなし

寺山修司「空には本

その日からきみみあたならぬ仏文の 二月の花といえヒヤシンス

福島泰樹「バリケード・一九六六年二月」

コロッケを揚ぐる肉屋の香が流れ小学校の帰路ぞかなしき

岩田 正「郷心譜」

かつてここに立ちし若者はわれなるか大学構内銀杏散るなか

橋本喜典「悲母像」

消しゴムをよくなくしたと思ひ出す一般教養の階段教室

糸川雅子「夏の騎士」

梅雨の日は征きて還らぬ制服の死者も来ている早稲田大学

佐佐木幸綱「はじめての雪」

文学部危機といへども先生はこの平日を学校にこず

坂井修一「アメリカ」

卒業は遠ざかること プレパラートに頭を寄せ合えるこの夜からも

永田 紅「ほんやりしているうちに」

講堂よりオルガンの音もれるとき秋はゆたかな深呼吸する

小島なお「乱反射」

キャラメルが窓辺で姿かえている東階段室におります

東 直子「春原さんのリコーダー」

葉桜の香り自転車置き場にもしたたるばかり（好きな子はだれ？）

野口あや子「くびすじの欠片」

惨めなる論理に堕ちて行かんとす我よ論理は憎しみを生む

高安国世「朝から朝」

退きてゆく生徒と語る一時間はかなけれども無駄にはあらず

森山晴美「グレコの唄」

大方の憎しみの中にわれは愛す師を尊ばぬ子の潑刺さ

馬場あき子「地下にともる灯」

不機嫌な妻子を描きてまたもどる夜半を灯しおきしわが実験室

永田和宏「華氏」

サンリオのお洒落ノートが机に見えて俺の講義を彼女らは待つ

鳥田修三「晴朗悲歌集」

ゆゑ知らず涙はひとにうつりゆく卒業式の半ばを過ぎて

内藤 明「夾竹桃と葱坊主」

なごりゆき卒業生ちる校庭に箒と熊手寄り添ひてをり

川野里子「太陽の壺」

壇のなかに帆船織く傾きぬ籠りて過ぐる子の卒業期

佐伯裕子「あした、また」

二学期の始まりて教師われ思ふ学校は一にけたたましき処

小池 光「日々の思い出」

だれもゐなくなつた夕べの教室に椅子すんすんと脚がのびゆく

大辻隆弘「夏空彦」

自己視線恐怖に悩む少年と海まで来たり、だが海を見ず

伊藤一彦「海号の歌」

傷つけてはた傷つきて来しことの形見のごとし草の残り日

佐藤通雅「水の涯」

集団の力学のなかに身を置きてナイフをつねに持ちあるくM

久我田鶴子「雨の葛籠」

変声期むかえし少年帰りゆき池の面静かに校舎うつせり

今井恵子「分散和音」

教卓の前の席にて笑ひをりあしたも来いよ笑はせてやる

柳 宣宏「施無畏」

自殺率高きこの国にやってきて学ばむとする留学生よ

大口玲子「ひたかみ」

山間の小学校は休暇にて地球儀ひとつ教卓を占む

奥村晃作「三輪幼虫」

丘の辺に小学校の鐘響き日々の旅人としてわれは聞きたり

三枝昂之「太郎次郎の東歌」

ノースウエスタン大学図書館東洋文庫に「改造」を読む晩秋の午後

秋山佐和子「空に響る樹々」